© 東京新聞

生活

旬のさかな　穴子

江戸前の天ぷらやすしが有名ですが、なかでも羽田沖で取れたものがよしとされます。暑い夏には白焼きでさっぱりといただきます。

くらしのこよみ
うつくしいくらしかた研究所

Dr.松井英男の 在宅医療のカルテ

病診連携で在宅療養も

●進行大腸がん

進行大腸がんは、便秘や下痢症状が続いているうちに急に腸が詰まってしまう、腸閉塞(へいそく)の状態で発症することがあります。

三十代女性のYさんは、急激な腹痛と嘔吐(おうと)を訴え、緊急入院しました。診断は、大腸がんに伴う腸閉塞。翌日、腫瘍の摘出手術が行われました。術後の経過は良好で、退院後は外来通院していたのですが、血液検査で再発が疑われ、抗がん剤治療を受けました。いったんは治療の効果があったものの、骨盤の中にがんが転移し、痛みも伴うように。痛みの緩和と放射線治療が続けられましたが、次第に腫瘍が大きくなり、これ以上の治療を断念したのです。

Yさんには、「自分らしく生きたい」という願望がありました。

母親の力添えもあって、小さな子どもの面倒をみながら、在宅緩和ケアを始めました。

在宅では、痛みの抑制ができ、食事もできる状況になったのですが、再び腸閉塞を起こし、薬剤の持続注射の治療を受けました。それでも症状が改善しないため、次には、外科の先生と相談して人工肛門を作る手術となりました。

腹部の診察をする

その後も、腫瘍からの出血に対し、入院しての輸血など、さまざまな対応が必要になりました。Yさんも頑張ってできるだけ在宅で療養し、自分で食事をする努力を続けました。この間には、臨床心理士の先生も交え、患者本人と家族の心のケアが行われました。小さな子どもも、母親の置かれている状況を漠然と理解し、母親の手伝いをするようになりました。

最期に、Yさんは、皆に囲まれながら、自宅で息を引き取りました。消化器がんの在宅での緩和ケアは、家族の理解と、病院・診療所の連携があって、はじめて可能になると思います。

（川崎高津診療所院長）

＝次回は十八日掲載